立教大学学術推進特別重点資金（立教ＳＦＲ）
大学院生研究
２０１３年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院　現代心理学　研究科　臨床心理学　専攻		
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏　名	
	現代心理学研究科　臨床心理学専攻博士課程前期課程２年	竹森　亜美　印	
指導教員	所属･職名	氏　名	
	立教大学現代心理学部　教授	大石　幸二　印	
自然・人文・社会の別	自然　・　人文　・　社会	**個人・共同の別**	個人　・　共同　名
研究課題名	小学校と連携した書字困難の早期把握にむけたスクリーニング―運動調節に焦点をあてて		
研究組織	在籍研究科・専攻・学年	氏　名	
	現代心理学研究科・臨床心理学専攻・博士課程前期課程２年	竹森亜美	
研究期間	２０１３　年度		
研究経費	（支出金額）　86 千円　／（採択金額）　200 千円		

研究の概要（200～300 字で記入、図･グラフ等は使用しないこと。）

近年，通常の学級に在籍する子どもたちの中に，一斉指導を受けても十分に平仮名の読み書きを習得できない子どもが少なからず存在することが報告されている（例えば，大庭，2008）。書字のつまずきは，言語発達途上での障害であるため文字学習開始期まで顕在化しにくい（河野，2008）こと，自尊感情の低下といった派生的つまずき・困難をもたらす可能性があることも指摘されている。そこで，本研究では，小学校のことばときこえの教室および発達・情緒障害通級指導教室（以下では略記する）の教員と連携し，書字のつまずきを抱える児童のスクリーニングおよび取り出し支援をおこない，スクリーニング方法の開発と必要な体制についての示唆を得た。

キーワード（研究内容をよく表しているものを３項目以内で記入。）

〔　書字　〕〔　運筆　〕〔　学習支援　〕

研究成果の概要（図･グラフ等は使用しないこと。）

目的

本研究では，書字のつまずきのスクリーニングにより書字のつまずきの実態を把握することおよび取り出し支援（＝放課後に取り出して学習指導を行うこと）を通して学校現場で学校の教員が無理なく行うことができる支援ツール・支援方法・バックアップ体制について明らかにすることを目的とする。

①書字のつまずきのスクリーニング

方法

対象児

公立ｘ小学校の通常学級に在籍する１年生 86 名（男子 38 名，女子 48 名）と２年生 84 名（男子 36 名，女子 48 名）の計 170 名であった。

実施期間および実施場所

本研究は対象児が通うｘ小学校にて，ｙ年７月～11 月にかけて実施された。本研究の実施に先立って，通常学級担任および保護者への説明を行い，了解を得たうえで実行された。

課題実施者

A 大学大学院生女性１名とｘ小学校ことば･きこえの教室の教師１名であった。

課題

課題は，「運筆課題」と「作文課題」を実施した。

1.運筆課題

運筆課題は，通常学級に在籍する児童にひらがなから一部を抜粋した図形を用いて作成した運筆課題を実施した。運筆課題は，ｘ小学校ことばときこえの教室の教師１名が朝自習や補習・自習を行う時間に実施した。

2.作文課題

作文課題は，対象児が授業内に取り組んだ作文を分析に使用した。作文は，通常のカリキュラムに沿って授業中に取り組まれたものであり，小学校１年生はあさがおの観察日記と社会科見学の感想作文，小学校２年生は行事の感想作文と国語の授業で文章構成の練習のために書いた作文であった。

分析方法

運筆課題では，描線が始点および終点を結ぶ指定された線分から逸脱した箇所を「逸脱エラー数」として，描線が始点および終点の指定された範囲内におさまっていない数を「定位エラー数」として分析を行った。作文課題では，句読点や助詞，特殊音節の使用など文字の「書きぶり」についての 13 のエラーパターンを設定し，エラー分析を行った。

結果

運筆課題の逸脱エラー数の平均は，１学年は 12 であり２学年は８であった。作文エラー数の平均は，１学年は３であり２学年は 11 であった。このことから，運筆課題のエラー数の平均は２学年になると減少するが作文課題のエラー数の平均は２学年になると増加することが明らかとなった。また，運筆課題と作文課題の両方でつまずきを抱える児童は，１学年の児童 86 名中３名が運筆課題での逸脱のエラーと作文課題の文章量のエラーの両方を，６名が運筆課題での逸脱のエラーと作文課題の文字の書きぶりのエラーの両方を抱えていることが明らかとなった。また，２学年の児童 86 名中，５名が運筆課題での逸脱のエラーと作文課題の文章量のエラーの両方を，５名が運筆課題での逸脱のエラーと作文課題の文字の書きぶりのエラーの両方を抱えていることが明らかとなった。

考察

本研究の結果，運筆課題では２学年になると１学年と比べエラー数の平均が減少するが，作文課題では２学年になると１学年と比べエラー数の平均が増加するという結果となった。このことは，学年が上がると運動調節は発達し上達するが，

研究成果の概要　つづき

作文課題は学年が上がると作文のテーマや構成，用いる語彙の難度があがり，文中でカタカナや漢字が用いられるようになり，文の長さも長くなることからエラーが生起しやすくなるためであると推察される。また，運筆課題と作文課題の関連を検討したところ，各学年で運動調節と文字の書きぶりの両方につまずきを抱える児童が一定数いる可能性が示唆された。

②書字のつまずきの取り出し支援

方法

対象児

公立ｘ小学校通常学級に在籍する男児６名であった。学年は，２年生１名，３年生２名，４年生２名，６年生１名であった。いずれの対象児も，通常学級に在籍しているが書字につまずきがあるとして，通級およびことばときこえの教室の教師より支援の必要性があげられたため，取り出し支援を実施することとなった。

実施期間および実施場所

本研究はｙ年４月～ｘ＋１年３月にかけて，対象児が通うｘ小学校のことばときこえの教室内の一室にて原則週１回実施された。本研究の実施に先立って，通常学級担任および保護者への説明を行い，了解を得たうえで実行された。

課題実施者

Ａ大学大学院生１名およびＡ大学学部生１名と，対象児が通う小学校のことば・きこえの教室の教師１名であった。

課題

書字の基本的スキルである運動調節を高めるために，「点つなぎ課題」や「線つなぎ課題」といった「運動調節課題」を行った。また，文章構成のルール理解と文章中の誤りの発見・訂正を目的とした「作文訂正課題」を行った。

結果

「運動調節課題」は，取り出し支援開始期は，見本と同じ形を描くことに注意を向けるよう声がけを行うことにより，全対象児が空間の中に正しく図形を配置できるようになった。また，取り出し支援後半では，より正確に丁寧に描線することを目標とすることにより，まっすぐ線を引くことや角を正しくとるなどの運動調節の力が向上した。一方，「作文訂正課題」では，取り出し支援開始期は，文章構成のルールが書かれたヒントを参照しながら文章中の誤りを発見することを目指した。取り出し支援後半になると，ヒントを参照することなく全対象児が独力で作文中の誤りを訂正できるようになった。

考察

運動調節課題は，書字につまずきを抱える対象児にとって無理なく取り組める課題であったため，学習への動機づけを高め，苦手な学習に取り組むための導入課題として有効であった。作文訂正課題は，助詞「は」と「わ」の使い分けなど対象児が混乱している文章構成のルールを再確認することにつながったと考えられる。

全体考察

書字のつまずきのスクリーニングおよび取り出し支援から，書字のつまずきの支援は，運動調節に関する支援を小学校入学後の早期から開始することにより，書字に対する負荷やつまずきを拡大化・複雑化させないことが重要になると考えられる。また，通常のカリキュラムに沿った授業においても，書字のつまずきのアセスメントという観点を持つことにより，つまずきの発見につながる可能性が示唆された。一方，書字のつまずきを抱える児童に対する学習支援では，学習への動機づけに配慮し，課題難度や課題量を調整しながら，スモールステップで進めていく重要性が示された。

研究発表（研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。）

①雑誌論文（著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ）
②図書（著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数）
③シンポジウム・公開講演会等の開催（会名、開催日、開催場所）
④その他（学会発表、研究報告書の印刷等）

本研究の一部は，学校現場において書字のつまずきを早期に把握し早期に支援するための実践例として学会発表を行う予定である。（特殊教育学会を予定）